

「和莊兵衛」と「胡蝶物語」について

— 近世語研究 (八) —

深井一郎

はじめに

註1 さきに「夢想兵衛 胡蝶物語」について、その国語学的様相を報告した。いま「和莊兵衛」を採りあげるのは、「胡蝶物語」の著者宝井馬琴が同書の発端において「一日遊谷子^{あそびやうこ}が著したる、和莊兵衛^{わさうべい}といふ冊子を見て思ふやう」と記していることから、馬琴は「和莊兵衛」を見た上で「胡蝶物語」を著したことは明らかであり、「胡蝶物語」の角書とした「夢想兵衛」も「和莊兵衛」のもじりであることは確かであろうと思われる、この両書を比較して考察する必要を覚えたからである。

そこで、本稿においては次の三点を明らかにしてみたいと思う。
イ、「和莊兵衛」の国語学の実態を把握する。

ロ、「和莊兵衛」（後編を含め）全八巻について、後編の作者は同書の島親水の序に「今是にもれしを、澤井何某のかい集て一部^{いちぶ}の書となる」と記されているところから、前編^{ぜんぺん}の著者「遊谷子」とは別人と考えられている。このことから、「和莊兵衛」の前編・後編の相違を考察する。

ハ、「和莊兵衛」を見た上で「胡蝶物語」を著したと馬琴が述べているところから、この両書の比較を行なう。単に発想の模倣

なのか、構想全体の類似なのか、また記述に見られる国語学的な特色の比較からどのような結果が得られるのか、などを検討する。

ついで、今回の調査研究に用いたテキストについて述べる。

◇「異国奇談 和莊兵衛」 半紙本四冊。秦川散人の叙につづいて自序があり、その末尾に「南阿 遊谷子^{あそびやうこ}とあり、著者と目されている。紺色帙入の架蔵本。

題籤は「異国奇談 和莊兵衛 和（莊・兵・衛）」。

内題は「異国奇談 和莊兵衛卷一（二・三・四）」。

タテ 二二・四糎、ヨコ 一五・七糎。藍色の元表紙・元綴糸。

各巻に見開き二枚宛の絵がある。

刊記は、「安永三甲午年正月吉日（一七七四年）」

江戸本石町十軒店 山崎金兵衛

三都書林 大阪心斎橋安堂寺町 大野木市兵衛

京寺町通錦小路上ル町 錢屋利兵衛板。

各巻の内容は次の通りである。

巻一 不死国（3オ13オ）養生（13オ15オ）

巻二 自在国（1オ18ウ）養生（9オ10オ）

巻三 矯飾国（1オ16ウ）養生（6ウ18ウ）

好古国（8ウ14オ）養生（14ウ15ウ）

卷四 自暴国（1オ―6ウ） 養生（6ウ―8オ）

大人国（8オ―15ウ）

この「養生」は、「無病の人の養生といふべし（巻二）・養生の第一成べし（巻三）・くはしくは医にたつて其さしづにすべきことなり（巻三）・万病おこらず長寿なるへし（巻四）」というような文末を持つ。内容は必ずしも健康法が述べられているわけではないが、形式は此様な結び方を示している。

◇「異国再見 和莊兵衛後編」 半紙本四冊。島観水の序に「爰に和莊兵衛といふて、樂を寓言にして、人を悦しむる書先にある、今是非にもれしを、澤井何某のかい集て一部の書となる、……げに和の莊兵衛の後へんならんかし。」と見え、澤井何某が作者と考えられている。又、書名についても、「唐の莊子」をもじつて「倭の莊兵衛」なる人名を以てしたことが分る。本書は板本を用いることが出来ず、「徳川文芸類聚 第三巻」所収のものを用了。

刊記は、「安永八亥年正月吉日（一七七九年）」

京都書林 寺町通佛光寺下ル町 錢屋利兵衛。

各巻の内容は次の通りである。

卷一（清浄国）

卷二 長足国

（手長島）

吝奸国

卷三 大膽国

金銀宝玉国

卷四 交蛮国

（晏陀国・雷鳴国・大食国・猛火国・猿似国・長毛国・長耳国・土糧国・三珍国・靈龜国・女人国）

見出しとして掲げられた国名と、文中に出て来る国名との間に

（ ）内の国名は、各巻の見出し項目として掲げられていないが、本文中に記されたものである。

差は認められない。巻二の「手長島」は国名と見るには問題もあろうが、巻一の「清浄国」は当然、国名として見出し項目に掲げるべきものである。巻四の「晏陀国」以下十一の国名は、見出し項目の「交蛮国」との関係が何等記されておらず、巻四の記述は「晏陀国」から始まり、「女人国」で終り、長崎の浦で目を覚まして完結する内容となっており、未整理の譏りはまぬがれないであろう。また、この十一ヶ国についての叙述も、きわめて粗略であり、思いつくままに列挙したに過ぎるようである。

◇「夢想兵衛 胡蝶物語」 半紙本五冊。曲亭主人の自序。タテ 二二・四糎、ヨコ 一五・六糎。灰黒色の元表紙・元綴糸。架蔵本

題簽は、「夢想兵衛胡蝶物語前編 壹（式・参・四・五）。内題は、「夢想兵衛胡蝶物語卷之一（二・三・四・五）」

東都 曲亭馬琴 戲編。

卷一には、自序に続いて次の四帖がある。

>赤 少年国はその遠近いくばく里といふをしらず

少團 絵 属寫およそ四ツあり水子鳴といひ不教寫といひ

鴻 さいはぢけ鳴といひ孝行鳴といふ是なり

年垂 絵

獅 しょうねんこく 絵

泣 絵

虫 絵

この国に赤團鴻といふ鳥ありかしらはもぐさのごとくからだはかわらけのごとく足は灸はしに似たりはなつたら獅子は口より二すぢの青はなをなく泣虫は又かんの虫共いふめそくなく虫也

色張いろはり 蛇へび 絵

しきよく国にうは木おほし又くがい竹といふ竹あり
この竹二十五のあかつきにきりてればきれてしまふ
こともありすそつはり蛇はその頭くらやみてまねく
が如しゆだんすべからず

慾よく 浮う 木き 絵

しきよくこく 絵

国くに 深ふか 南みなみ 絵

又あくぢよのふかな鮭さけといふ魚ありそのかしら手を
あはせておがむがごとし又しつふかとふか鮫さめありこ
れにあへば命をうしなふおそるべしつしむべし

強つよ 跡あと 絵

ごういん国は酒をもつて食とす魚はいはぼつたらお
ほしあとひきといふひきがへるありつらの赤きあり
また青きもありはらにさかだるのしるしあり

飲の 津つ 青あお 桐きり 絵

ごういんこく 絵

国くに 伊い 具ぐ 絵

あをつ桐はその葉つつ茶わんのごとく木はびんばう
とくりに似たりぐいのみといふのみありちよいとさ
してじきにとんでゆくこの餘めいしよは本文に見え
たり

食く 次じ 計けい 絵

どんらん国はむきばつてあくことをしらずそのつめ
ながきこと手なが嶋のごとくつめの先へ火をともし
あたじけなしといふなしの木ありその葉一文ぜに
なまづめをはがせし如し

焚くわ 促そく 慾よく 織おり 絵

どんらんこく 一名 爪長嶋 絵

国くに 腕うで 止とど 絵

又よくばつたといふ虫あり此むし義理とはちをしら
ずあたまへぎうりをいただきてもほしいくとなく
也又しわんばうといふ鳥あり南鯨をきはめて九万
両に羽をのさんとす

◇「夢想兵衛胡蝶物語目録」として、「少年国・色慾国・強
飲国・食禁国」（三行割註は略す）を掲げている。

「夢想兵衛 胡蝶物語後編」 半紙本四冊。曲亭馬琴の「再編
胡蝶物語序」と題する自序。

タテ 二二・四厘、ヨコ 一五・六厘。灰黒色の元表紙・元綴
糸。架蔵本。

題籤は、「夢想兵衛胡蝶物語後編 壹（式・参・四）」。

内題は、「夢想兵衛胡蝶物語後編卷之一（二・三・四）」

東都 曲亭馬琴 戲編。

巻之一には、馬琴自序の次に左の四帖がある。

○食言郷産物之図。いつわり蛇・ない琴・九万蜂・口秤
虚月爺二郎弁舌を以て灰吹から大蛇をいだす処（絵）

○煩惱郷産物之図。大不驚・夫婦井竟の勝示・恋の病犬・ブツブ
ツ小五塔・膝共檀香（絵）

物思ひの君胸にけふりをなしてどうせう蚊かうせう蚊といふ蚊をおはんとする処。(絵)

○哀傷郷産物之図。血の南彌陀・後世のいと浪・四鳥の輪蝶

(絵)

かなし屋のよよなきなみの雨に袖をぬらす処。(絵)

○歡樂郷土産図。おめでたう△り舛・ひだりうちわ・子孫はん錠・

たのしいか菜・曇りかすみなし・わがいへらく
のかなたらひ (絵)

人のたのしみにさまゝある処 (絵)

ついで「再編胡蝶物語総目録」として、「第一 食言郷・第二 煩惱郷・第三 哀傷郷・第四 歡樂郷」を掲げている。刊記は、巻之四 大尾の後、馬琴の跋文に続いて、次のごとくに記される。

「東都 曲亭馬琴著作 (七弦琴の線描の上に記す)

一 柳斎豊廣画 (大鉞の線描、柄に記す)

平林蔵梓 (菊花二重の線描上に記す)

全本前後九冊 文化庚午発市 (左上二行書)

(一) 「和莊兵衛」の国語学的実態

「和莊兵衛」の前編・後編を通して、国語学的検討を加えることにする。一つの注意点として、前編の各話の末尾に付けられている「養生」の部に、特に変わった所はないかを注目する。音韻・表記、語法・文体、語彙の分野について記述してゆくことにするが、同書の前編・後編の差違については次章に委ねる。

イ 音韻・表記

まず母音では「e↓i」が目立つ。(一)内は振仮名)

○臺(かいる)〈巻一〉 科斗(かいるのこ)〈巻三〉

○痲癬(けんびき)〈巻一〉

○羽二重(ハふたひ)〈巻二〉 羽二重(はふたひ)〈巻三〉

黒羽二重(くろはふたひ)〈巻三〉

○ふるい(震)〈巻三〉

○古綿入(ふるわたいり)〈巻三〉

ついで、「i↓e」として、次の例がある。

○境(さかへ)〈巻一〉

○そろへの前だれ〈後巻四〉

なお、次の例は、恐らくは誤記かと思われる。

○這入て(はふいりて)〈巻一〉

○行バ(ゆくば)〈巻一〉

○染バ(しみば)〈巻二〉

○にくてらし〈巻二〉

○友呼つれて(ともよぶつれて)〈巻二〉

「ゐ・ゑ・を」の仮名遣では、「ゑ」が目立つ。

○栄耀栄花(ゑようゑいくハ)〈巻三〉

○得(ゑ)た事得(へ)ぬ事〈巻三〉

○喰得(くひゑ)る事〈巻四〉

○矢をゐる〈後巻一〉

○くはゑ来り〈後巻四〉

○おびゑぬやうに〈後巻四〉

つぎに子音では「ワ」音に「ハ」「わ」の混用が見られ、特に語による片寄りはなくあり、区別はしてはいないと思われる。語中語尾の意識も働いていないようである。

○聲繕ひ(こはつくる)・押合(おしハけ)・西瓜(すいくハ)・栄花(ゑいくハ)・因果(いんくハ)・業に(ハぎ)・喰咄(けんくハ)・悪阻(つハリ)・笑ふ(ハラ)・三皇(さんくハう)・童(ハ

らへ)

○始皇(しくわう)・西王母(せいわうぼ)・賞翫(しやうくわん)・
和中散(わちうさん)・菓子(くわし)・花月(くわげつ)・喧嘩
(けんくわ)・外科(げくわ)・因果(いんくわ)
四つ仮名に関しては、前編に乱れが目立つ。誤りの例をあげれ
ば、次の如くである。(此項一部の例示にとめる)

不定(ふじやう)・城下(ちやうか)・千疊敷(せんじやうじき)・
太陽女(たいやうしよ)・人參(にんちん)・治(じ)する・除
福公(しよふくかう)・なんじ・何じややら・これじやによって・
迎えておじや など

「治する」が前編巻一に四例あるが、すべて「じ」である。ま
た「じや」が後編においてすべて「じ」であるほかは、とくに片
よりは見られない。「人參」が「ちん・しん」、「除福公」が「ちよ・
しよ」の両形が同一の巻中に見られるなど乱れている。

拗音としては、合拗音に表記された語が二十語ある。俊寛(し
ゆんくわん)・因果(いんくわ)などである。後編には「ぐわらり
と」(巻三)の一語のみが見られる。なお、直音化した表記として
は、「廣言(かうげん)」(巻二)が見える。

長音における開合の表記については、前編に混用・誤用が目立
つようである。

結構(けつかう・けつこう)・不老(ふろう・ふらう)・唐物(と
うもの)・金橋(きんきやう)・草木(そうもく)・往来(おうら
い)・別業(べつきやう)・朝夕(ちやうせき)・瑞翁(すいわう)・
隙状(ひまでう)・聊尔(りやうし)

後編では、甲(かう・こう)の混用、とふとき(貴)の誤用を
のぞくと、乱れは見られない。とくに多用されている「やうな」
「さうな」については、全く乱れはない。

長音・撥音・促音の短音化の現象は、いくつか見られる。

自由(じゆ) (巻二)・奉公人(ほうこう) (巻三)・滞留(たいる)
(巻三)・不自由(ふじゆ) (巻三)・柵檀(せんだ) (巻三)・国
風(こくふ) (巻四)・奉公(ほうこう) (巻四)・士農工商(しの
うこしやう) (巻四)・旅宿(りよしき) (巻四)・旦那様(後巻
三)・よからか(後巻三)
ほかには、次のようなものが見られる。

四時(しいし) (巻一)・朝暮(ちやうほう) (巻三)・ぎあん直
し(巻四)

口 語法・文体

まず代名詞について述べる。総数は次の通りである。^{註6}

巻一	69 (10)・8 (1)	計 77 (11)
巻二	39 (5)・9 (2)	" 48 (7)
巻三	35 (7)・7 (3)	" 42 (10) ^{註7}
巻四	29 (3)・8 (3)	" 37 (6)
	31 (11)・8 (3)	" 39 (14)
	64 (24)	" 64 (24)
後巻一	68 (24)	前編総数は 三〇七 (七二) 語
" 巻二	95 (21)	後編総数は 三二三 (六八) 語
" 巻三	63 (11)	奇しくも極めて類似の数値である。
" 巻四	87 (12)	
つぎに、各巻ごとに、人称代名詞をあげてみよう。		
巻一、自称、我(われ・わが)	7、	
他称、其方(そのほう)	2、汝(なんぢ)	1、
ほか、己(おのれ)	1、	
巻二、自称、私(わたくし)	1、我(わが)	1、
他称、其元(そのもと)	1、	
ほか、誰(たれ)	1、自(みづから)	1、

卷三、自称、わたくし 2、手前 2、我(わが) 2、
こち 1、

他称、お前様 1、旦那 1、旦那殿 1、

自称、手前 1、こち 1、こち 2、我(わが) 1、

他称、其方 1、

卷四、自称、おれ 1、こち 2、我(わが) 1、

他称、旦那殿 1、こなさん 2、我(われ) 2、

こなん 1、

ほか、おのれ 2、己(おのれ) 2、

自称、我(わが・われ) 13、某(それがし) 1、

他称、其方 1、汝(なんぢ) 8、

ほか、をの 1、〔傍線の語は、「養生」の部のもの〕

後卷一、自称、我(わが・われ) 6、拙龜 2、拙佛 1、

私(わたくし) 2、拙者 2、

他称、汝 3、其元 2、足下 2、そち 1、貴佛
様 1、

ほか、誰 1、自分 1、

後卷二、自称、拙者 1、我(わが) 2、われ 4、拙龜 2、

わし 1、私(わたくし) 1、こち 2、

他称、足下 4、貴殿 1、そち 1、旦那様 1、

旦那殿 1、

後卷三、自称、拙者 2、拙龜 1、我(われ・わが) 4、

他称、足下 1、其方 1、先生 1、其元 1、

後卷四、自称、拙龜 4、私ら 1、わたくし 1、我(わが)

3、

他称、貴公 2、其方 1、

ついで動詞の様相について検討を加える。

四段活用動詞の全容は次の通りである。

	未然形	連用形	音便形	終止形	連体形	已然形	命令形	(計)		計	後卷一	後卷二	後卷三	後卷四	計	総計
卷一	34	143	16	17	50	13	1	274	養生	8	24	2	8	50	141	52
卷二	14	90	4	8	22	3	0	141	養生	6	25	3	6	52	121	43
卷三	13	67	17	3	16	4	1	121	養生	9	20	3	9	43	141	40
卷三後	19	77	11	5	17	11	1	141	養生	9	11	2	9	40	182	48
卷四	36	66	32	8	29	10	1	182	養生	13	14	2	13	48	226	1318
卷四後	36	118	22	9	29	11	1	226	養生	13	14	2	13	48	226	1318
計	197	655	121	69	208	62	6	1318	計	118	408	50	78	116	61	22
後卷一	30	132	6	15	23	15	5	226	後卷一	30	96	20	25	37	17	9
後卷二	35	96	20	25	37	17	9	239	後卷二	35	96	20	25	37	17	9
後卷三	31	92	7	13	23	14	7	187	後卷三	31	92	7	13	23	14	7
後卷四	22	88	17	25	33	15	1	201	後卷四	22	88	17	25	33	15	1
計	118	408	50	78	116	61	22	853	計	118	408	50	78	116	61	22
総計	315	1063	171	147	324	123	28	2171	総計	315	1063	171	147	324	123	28

命令形が、前編が少く後編に多いこと、音便形が、前卷一・前

その他活用の動詞の実態は、次の通りである。

卷三・前卷三後養生・前卷四・後卷二では多く、前卷二・後卷一・後卷三に少いと巻によって差違が目立つ。

上二段の動詞は、後編巻四に見える「用ゆる」一語である。もつとも、前編巻一に「用（もちゆ）べからず」「用（もちひ）て」と見え、仮名遣の問題と見るべきかも知れない。これを除くと正しく上二段と判すべき形は見られない。下一段の動詞が、後編にくに少い。「引かける」「苦勞かける」（巻三）「はせる」「いへる（癒）」（巻四）のみである。変格活用では、カ変は「来る」、ラ変は「有り」、ナ変は「死ぬ」の各一語である。ラ変ナ変は、五段活用と認められない活用形のみを数量化した。後編にナ変が一例も見られないのは「死ぬ」の語が表われないためである。サ変は、「為」と「漢語＋サ変」である。

形容詞・形容動詞の活用について前編では、形容詞の中「ク活用」「四三六語」「シク活用」九九語で、両者間に大きな差が見られる。また、形容詞の中で、終止形 八三語中一二語、連体形 一

計	ラ変	ナ変	サ変	カ変	下下二	下二段	下一段	上上二	上二段	上一段	
145	21	12	23	4	63	6	6	2	0	8	巻一
36	8	3	8	0	13	2	0	1	0	1	養生
117	16	0	12	4	63	5	3	5	0	9	巻二
32	7	0	3	0	13	3	0	2	0	4	養生
94	7	4	12	2	46	3	4	0	0	16	巻三
35	4	0	11	1	14	1	0	0	0	4	養生
82	5	0	22	4	37	0	3	3	0	8	巻三後
36	1	0	12	0	16	2	0	2	0	3	養生
95	8	2	19	3	32	0	9	5	0	17	巻四
28	3	0	8	1	10	0	2	0	0	4	養生
134	21	0	31	1	53	0	1	1	0	26	巻四後
834	101	21	161	20	360	22	28	21	0	100	計
87	10	0	40	0	23	5	0	1	0	8	後巻一
145	19	0	45	2	52	9	0	0	0	18	後巻二
107	18	0	19	4	53	3	2	0	0	8	後巻三
121	22	0	39	2	35	8	2	2	1	10	後巻四
460	69	0	143	8	163	25	4	3	1	44	計
1294	170	21	304	28	523	47	32	24	1	144	総計

四九語中二〇語に「イ語形」が表われる。一方、後編では「ク活用」「一二五語」「シク活用」「四六語」「イ語形」は終止形 三一語中三語、連体形 二八語中四語が見られ少数である。連用形のウ音便形は、前編に一語、後編に七語が存する。特殊なものでは、前編巻四に「悪（あし）し」が一例見える。形容動詞の活用では、ナリ活とタリ活が両用されるが、ナリ活が圧倒的に多い。ナリ活の中で、連体形に「ナル」と「ナ」の両形が見られるが前編「ナル」五一語、「ナ」三六語、後編「ナル」一三語、「ナ」三語、前編後編の間に比較的大きな差がみられる。

助動詞の様相は、次の通りである。

候	ます	やうだ	ごとし	じや	なり	う(ふ)	む(ん)	けり	き	た	り	たり	ぬ	つ	
1	1	6	9	1	45	1	10	13	10	9	0	20	3	0	巻一
0	0	1	0	0	6	0	1	0	1	1	0	5	0	0	養生
1	0	4	2	1	21	0	7	6	5	8	0	19	0	0	巻二
0	0	1	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	養生
0	19	5	1	0	12	5	0	4	2	20	0	10	4	0	巻三
0	0	1	1	5	12	0	0	0	0	2	0	2	0	0	養生
0	2	6	5	7	11	0	2	1	3	9	2	7	3	0	巻三後
0	0	1	3	7	7	0	0	0	0	5	0	0	0	0	養生
0	2	11	0	13	11	1	1	3	1	13	0	4	0	0	巻四
0	0	5	1	1	5	2	5	0	0	2	0	2	0	0	養生
0	1	8	1	3	38	1	6	17	9	11	0	19	2	0	巻四後
2	25	49	25	38	172	10	32	44	31	80	2	88	12	0	計
5	3	3	2	0	34	0	10	13	20	3	0	14	4	0	後巻一
11	10	6	4	2	33	0	11	18	7	11	1	12	3	2	後巻二
7	3	3	1	0	22	1	11	11	9	3	3	13	1	0	後巻三
9	1	5	12	0	27	1	11	7	4	2	2	3	1	2	後巻四
32	17	17	19	2	116	2	43	49	40	19	6	42	9	4	計
34	42	66	44	40	288	12	75	93	71	99	8	130	21	4	総計

特徴的なことを三記することにする。「つ」が前編に皆無、後編に四例ときわめて少い。「ぬ」の用例も、前編に比して後編が多い。「り」は、前編二例後編六例で、ともに少数ながら、後編に多い。これに反して、「た」の例は、後編に対して前編の多さが目立つ。とくに前編巻三の数は際立っている。「き」の用例は前編巻一に「しか」が一例ある外は、すべて「し」である。「む・ん」と「う・ふ」の関係は、前編に「う・ふ」が若干多いようである。「じや」では、前編が後編に比して圧倒的に多い。前後編ともに「だ」語形は見

られない。「やうだ」の用法も、前編の多さが目立つところである。「ます」については前編巻三の異常な多数用例が目される。これは前述の「た」の多用と共に何等かの文体的特質を示すものと考えられる。「候」については、後編の用例の多さが目に付くところである。

表に示したもの以外（用例数の多少には無関係）について述べる。（語形・前編用例数・後編用例数・総数の順で掲げる）

れる 31、26、57 られる 5、9、14

- べし 26、22、48 たし 14、19、33
 せる 7、9、16 しやる 2、5、7
 なさる 8、9、17 ごさる 9、6、15
 ず 213、55、268 ざり 16、7、23
 まい 7、2、9 じ 4、3、7
 まじ 4、1、5 そうな 13、4、17
 んす 7、0、7 しむ 0、3、3
 つぎに助詞について記述する。特色あるもののみを掲げる。
 ○毎日毎夜磯辺に出て魚を釣けるが、後には船も能さし覚て、
 ○黒雲一むら立ぞと見へしが、雨風そよく催すれハ、
 ○夢のこく覚へけるが、忽気色たしかに、
 ○左様なら能ござりますかと嬉がることなり。
 ○ごくどうめが、どろぼうめかと、
 ○八百年已前の事成りしが、比しも秋の最中
 ○一入興を催しけるが、さも快晴成ける空
 ○夫より何が亀トも葡萄酒のめぐりが来て、
 八例を示したが、巻一の三例と後巻一の二例は、接続助詞ではあろうが、とくに何等かの関係を示す働きが弱まったものと見られる。巻一の最終例と巻四の例は、終助詞とでも言うべきものであろうか。後巻二の例は、「何が」と連語の形で考えるべきものかも知れない。既成事実を否定なしに認める意味で働いているものである。
 ○目のまふのを日本の者の酒に酔たるやうに嬉しがり、〈巻一〉
 ○死るのがこんなものて有ふと、〈巻一〉
 ○どうして死るのが悪ひやら、〈巻一〉
 ○いかやうのも是あれども、〈後巻二〉
 ○あれはこちのではないけれど、〈後巻二〉
 準体助詞と見てよいかと考えられる。例は是で総てであり、と

- くに採りあげる特色は見られない。前編・後編の間にも差異は認められないようである。
 並列の助詞は比較的用例数が多い。ここでは語形と用例数をのみ掲げることとする。
 ○鰻の鴨のとて、前 10 後 0
 ○何百里やら何千里やら 〃 9 〃 1
 ○嶋も山も 〃 8 〃 1
 ○今や後やと 〃 5 〃 1
 ○風と潮とに 〃 3 〃 0
 ○価千金とも二千金とも 〃 3 〃 0
 ○お茶でも香でも蹴鞠でも 〃 3 〃 1
 ○諷ひつ舞つ 〃 3 〃 1
 ○唐土か日本か天竺か 〃 2 〃 1
 ○泣てもわめひても 〃 1 〃 0
 前編四七例と後編六例との間には比較的大きな差が存する。とくに「—の—の」に著しい。
 係助詞は、次の用例で総てである。係結は崩れている。
 ○しなぬこそ幸なれ。〈巻一〉
 ○得がたきこそ人間のたのしみなれ。〈巻二〉
 ○能こそお尋かたじけなし。〈巻三〉
 ○乱に及ハすこそ承れ。〈巻三後〉
 ○そりやこそ例の石火矢様。〈巻三後〉
 ○出合し事こそ幸なれ。〈後巻一〉
 ○都こそ是則清浄国なり。〈後巻一〉
 ○一見あれかしといふにこそ。〈後巻三〉
 ○能こそ尋来りたり。〈後巻三〉
 ○こここそ異国廻りのこわ色に、〈後巻三〉
 ○何国ぞ新ひ国あるまひかと、〈後巻四〉

○堂の中へぞ入にける。 〈後巻一〉

○何ぞぬるみはないか。 〈後巻二〉

○氣絶して死すとなん。 〈後巻四〉

○寒さをしのぐとなん。 〈後巻四〉

終助詞には次のものが見られる。語形と用例数のみを示す。

ぞ（強意）前編9、後編7 や（詠歎）前編5、後編7

かな 前編6、後編4 か（疑問）前編6、後編3

かや 前編4、後編4 かし 前編0、後編4

ばや 前編1、後編2 よ（詠歎）前編1、後編2

はい・わい・わひ・わいな・わいの 前編4、後編0

ハ（強意）前編2、後編0 がな 前編0、後編2

な（禁止）前編0、後編1 げな 前編1、後編0

「わい」（強調）が前編にのみ用いられ「かし」が後編にのみ見られるのが、目立つ程度で、「ぞ・かな・かや・や・か・ばや・よ」などは、前編後編の間に差は認められない。

理由を表わすものとして、

○身たしなみに打か、つて居るゆへ手足のじんじやうに 〈巻二〉

○貧福なきゆえに樂もなし 〈巻二〉

○足こと有ゆへ病あり。 〈巻二養生〉

○思慮有ゆへ後をはかり、 〈巻二養生〉

○養ふてくれるゆへ奉公してやるのじや。 〈巻四〉

○身を遣ざる故に消化せず。 〈巻二養生〉

○名所古跡をおしへ申べき間必国へ御上りは御無用と 〈後巻三〉
などの用法がある。接統助詞というわけではないが、同種のはたらきをするものと考えることが出来る。「から」は用例を見ない。

右の外、なお次のようなものが見られる。

○何を其方が知た事。賢人が婦人のいふことを取上るものか。

○おのれが産やうが埒が明ぬゆへ男に長ふ苦痛さすわい。 〈巻三〉

○二三年も此事をのみに暮しける。 〈後巻四〉

○漸く夜に日について 〈後巻三〉 夜に日につきて 〈後巻四〉

ハ語彙

総体的に見て、漢語は和語に比して数が少い。漢語の中、「漢字表記・音読み」のものは、主に次のようなものである。

性得・金橋・境界・南京・北京・唐音・音声・群集・不道愚蒙・不仁・佛書・賞翫・追従・愚痴 〈巻一〉 豊饒・人品・美麗・慇懃・夕陽・遊芸・廣言・貴賤貧富・富貴・遊山翫水・過不及・禽獸・動作・消化・痰飲 〈巻二〉 榮耀榮花・文学・滯留・老若・深更・時節・義理・天命・才智・生理・旅宿・百姓・器物・博拊・佩玉・堪忍・竹箒・乱色・聡明・心底・弁説・放埒 〈巻三〉 挨拶・惣領・書籍・法度・畢竟・尊卑・安樂・比興・格別・聖賢・顔色氣力・聊尔・小兵・正直・執行・天性・糟粕 〈巻四〉 天性・生得・命数・講釈・神国・存念・時宜・廻廊高樓・忽然・仙術・愚痴無智・色情肉食・拝領・難儀・名所古跡・辨才・金銀愛欲・一默・餘国 〈後巻一〉 蛮国・運足・和睦・五穀魚類・地頭・智謀才覚・唐韻・吝倭・威儀・馳走・巧言令色・借用・康熙通宝 〈後巻二〉 異国執行・文学諸芸・珍器・再来・知行俸祿・嚴命・夷国・綸言 〈後巻三〉 滄海・産業・異形・材木衣服・渡世・蘇生・人壽・絶頂・巡見・裸形・邪智奸倭・莞爾・卒爾・尊敬 〈後巻四〉

「和語」には「仮名表記」「漢字仮名交り表記」「漢字表記・訓読み」などがあるが、例を示せば次の通りである。

仕にせよく・ちんぷんかん・たやみもなく・声繕ひ・中居・び

らしやら・よみ売・饗応・安房らしく・皺くたへ巻一〇心當・かけねなし・髪結床・どてら・豆板・色品・今織錦・にくてらし・飯焚・ほたへつくす・そこ〱にへ巻二〇はちつかす・出端・しよげに・紛紅・つまみ喰・あばれ喰・裏継・咳拂・丸ぐけ帯・人おどし・詔ひ飾・むかし絵・横尻する・しぼ〱と・賢人狂ひ・むかしびいき・冷腹へ巻三〇ぎあん直し・こはる・一情出す・けたいな・もやくや・鼻明す・なぶりもの・四方山の事・吞込・きよろつきまはる・悪あがきへ巻四〇あいたしこ・近廻り・こまかしく・こそつく・一寸も早くへ巻一〇さん候・かたくま・口ぎき・ぼうとろ・かなつんば・今出来・なじみ・すすばりあかばり・花生・ぬけめなきへ巻二〇しこうもうす・とつとろはげたる・そぎつき・まじくら・とじめく・わつさり・と・有たけ・はり札へ巻三〇いやとよ・女手わざ・穴かしこ・とらかす・まんがちな・はふがらへ巻四〇

一般的に言って、「和莊兵衛」においては、漢語よりも和語の方が多く用いられている。もともと、「漢字表記」で「音・訓」混合の語が、用例数では最多である。以下、語としても珍らしいと思われるものに限って例をあげよう。ごく一部である。

風雅兒・土地柄・御悔帳へ巻一〇辻番所・物好次第へ巻二〇吟つよい・人氣・半麦飯・虚言八百・前章門・行當次第・理屈嘸・二上り調子・畑船頭へ巻三〇隙状・じゆつな紛に・世間知りじまん・有体へ巻四〇かけ茶屋・抹香くさし・女旅宿・若隠居へ巻一〇逆もの儀・かるわざし・休息がてらあるじ旦那・雨合羽へ巻二〇居士衣・箱提燈・総揚・異国廻り・道具まわし・望次第へ巻三〇ねうはち・有馬細工へ巻四〇

「擬音語」には、次のようなものが見られる。「さつさ声」へ巻一〇「ちやうさやよふさ」へ巻二〇「わつぱさは」へ巻三〇「つ、てん〱」「つ、てん〱やつとせひ」へ巻三〇「ほきやあ〱」へ巻四〇「ハ

ア〱」へ巻一〇「きい〱」「ぢや〱」「ぐわらり」へ巻二〇ほかに「まじくじと」へ巻三〇「ぬつぺりこつぺり」へ巻二〇というものがあるが、擬態語かとも考えられる。

これら以外に、漢字と振仮名とが、直接の「ヨミ」（音・訓）とは考えられず、漢字・振仮名の両方を合わせて表意する方法と見られるものがある。読本類や、その源ともなった中国の白話小説の翻訳の中にあるものと似た性質と考えられる。次に例をあげる。

紅毛へ巻一〇 誅貽へ巻二〇 賴子へ巻二〇 別業（しもやし）へ巻三〇 時花へ巻三〇 日和持へ巻三〇 牽頭へ巻三〇 科斗へ巻三〇 穩婆へ巻四〇 東寧へ巻四〇 矮狗へ巻四〇

（二）「和莊兵衛」の前編と後編との比較

「和莊兵衛」前編と後編は、同一作者の手に成るものとの保証はない。それよりも、前編は序を書いた「南阿 遊谷子」が作者と認められているようであるが、後編は、島 観水の序に記された「澤井何某」が作者に擬せられている。両書は別人の手に成るものと考えるのが一般的なようであるが、此事も念頭に置きながら、構成・語法・文体などの面から比較を行なうこととする。

イ 構 成

まず登場人物であるが、主人公は、前編は「肥前国 長崎 四海屋和莊兵衛」、後編は同じく「肥前 長崎 渡海屋和莊兵衛」である。その人物像については、前編では「代々唐物商ひ仕にせよく、家内十人ばかりゆたかに暮しぬ。所がらといひ小文才もある男にて、常に唐人紅毛のつき合、和漢をあへまぜ、ちんぷんかんにくらしける」と記され、後編では「有徳成者有、天性生得律義にして、文学を好み聖賢の道を能貴び、市中に有て仙家の楽みを

なし、又いたづらに月日を送る事なく、家内むつまじく暮す」と描かれている。四海屋がどちらかといえば粹人、渡海屋が仙人風という差は見られるが、ともに有識者・徳人である点では共通している。遍歴する人物としての資格を具えた人といえよう。

さて、遍歴の物語の構成の最初として「発端」の有様を見ることにする。前編・後編ともに特別の項目を立てることなく、最初の物語（前編は不死国、後編は清浄国）の冒頭に記される（約二丁半）。前編では、釣に出た和莊兵衛が暴風雨に逢い、流されて「不死国」に漂着し、霊水を飲んで不老不死の身となる。不死国で「死」を羨む風潮に厭気を覚え、隣家から「羽つき鶴を盗出し」これに乗り飛び去る。嵐による漂流がそもその発端であり遍歴の道具となる鶴は、不死国から出る際に始めて登場する。後編では、八百年已然、暴風雨に流され不老不死国に着き、不老不死の秘薬を与えられ、鶴に乗り異国めぐりの後、日本へ還る。人も家居もなく（浦島咄を想起か）、再び異国の名所旧跡を再見したく、釣竿さげて浜に出、「鶴のおぢに」に当る亀に逢う。この亀の案内により異国廻りを始める。この亀は、前編の鶴と異なり、諸国の説明・案内をし、和莊兵衛に語り聞かせる役割をもつ。

前編後編の各巻の内容は、先に記したところである。前編は、それぞれの六つの国における叙述は、ほぼ六〜八丁と等量に近い。これに比して後編は、「大膽国」は最も短く、他の平均的叙述の量に対して約1/3であり、「吝奸国」も約2/3と短い。巻四は「交蛮国」の記事はなく、以下の十一国を合して、巻三の二国分の合計と等しいという状態である。十一国の中では、最後の「女人国」では和莊兵衛の体験談が記され、巻四の約半分近い分量を占める。他の十国は和莊兵衛の問いかけに誰か（恐らくは亀）が説明する形で叙述されている。前編の整然たる配列に対して、後編は巻一に見出しとして「清浄国」を掲げていない点や、とくに巻四の内

容など、十分に配慮され練られた気配はなく、或は、思いつくまま、筆にまかせて書きつづったかとも見られる様態を見せている。構成の上で、特色の一つは、前編にのみ見える「養生」の記事である。いま、その内容の要点を記す。（原文抜書）

巻一「不死国」不死国のやうに死たふ成も理りなり。略長寿を得んとて却て寿をそこなふ人多し。略不死国のことハリにてあきらめ。無理に仙人を羨す。死をおそれず。たた己をつつしみ心を泰山の安きにをくを。無病の人の養生といふべし。

巻二「自在国」自由自在に奢を極。美食にも飽衣服にもあき。遊山翫水も常に成てハ。此自在国のごとし。たのしみと成ことなく。貧賤の人よりおとる事多かるへし。略心も用ひされハ愚に成。身遣されハよくなる事。流れざる水のにごるがごとし。されハいか程富貴なりとも。毎日少し汗出る程。身を遣へハ人に病ハ多なきものとかや。

巻三「矯飾国」ないものを有只しらぬ事を知た良して。後の嘲りをしらす。目の前を飾る事なり。人間の養生に是より大な毒ハなし。略我胸を裸にして人に見せて仕舞ハ。人間の正直。神国の掟生理を安んずるとやらいふて。養生の第一成へし。

巻三「好古国」何程古の事を覚へ善を知ても身に行ざれハ。むかし漸沢山に覚て居ると同じ事にて。大な益ハなし。身の養生にも此類の心得違ひ多し。略薬にかぎらず灸も針も湯治も。くハしく醫にたつて其さしづにすべきことなり。

巻四「自暴国」人の養生も百病氣より生るといへハ。常に心の煩ひなきやうに、何事も後の報ひを思ひ。君父兄弟ハいふまでもなく。世の中に恨にくまれます。胸にあんし煩ふ夏なけれバ。自ら心安く心神勞する事なく。万病おこらす長寿なるへし。

巻四「大人国」^{註12}・汝らも此ちつばけな形で。ゑもしれぬ鼻のさきの小ひ智慧じまんして。悪あがき悪工せずとも。釈迦や孔子のい

ふ通おとなしう守て居て。一生心よく安樂にくらせよ。
共通した性格は、遍歴国の国情に対する評価と、それへの対処についての教訓と見ることが出来る。このような内容や、それと類似の記述は、後編にはどこにも見られない。

口語法

語学的実態は先述したところである。ここでは、その中から、前編と後編とで差違の著しいものを、まとめて採り上げる。

○代名詞（人称）では、

前編は、手前・おれ・それがし・こなん・こなさん・われ

後編は、拙亀・拙者・拙仏・貴公・貴仏・貴殿

このように、前編は和語、後編は漢語風の語形が特色である。

○用言（動詞）では次のような差が見られる。

前編は、上二段なし、下一段多し、ナ変多し、四段命令形少し
後編は、上二段一語、下一段四語、ナ変なし、四段命令形少し
ナ変の大きな片寄りは、前編巻一が「不死国」であり叙述に欠かせない単語であるから、此巻だけで十五の用例がある。それでも巻三に四例、巻四に二例が存する。後編に「死ぬ」はなく、五例の「死す」が存する。前編には「死す」が見えないのと併せてみれば、或は筆者の個性に基づくものと考えられる。また、命令形が後編に多いのは、後編巻二・巻三に集中しているわけで、巻二のそれは、亭主がもてなしのため下女たちに用を言い付けている描写の個所であり、巻三では亀が和莊兵衛に動作をうながしているものである。二か所に集中はしているが、やはり文体的特色の一つと考えることは出来る。

○助動詞には、或程度はつきりとした傾向が見られる。

まず、時制の助動詞で、「つ」「ぬ」「り」が後編に多く前編に少く、一方で「た」は前編に多く後編に少い。則ち口語の「た」が

時制の助動詞全体に占める比重において、前編が31%後編が11%であり、一方、文語の「つ・ぬ・り」のその比重は、前編5%強後編20%弱である。このことから、前編が後編に比して口語的の性格が強いと見うる。同じく「む（ん）」「う（ふ）」「なり・じや」「ごとし・やうだ」において、口語的の性格の強い「う（ふ）」「じや」「やうだ」が、前編に多く後編に少く、逆に、文語的の性格の強い「む（ん）」「なり」「ごとし」は少々ではあるが前編より後編の方が多用されている。また「候」が、前編に見られず、後編のみ表れるのも、文章語的の性格の強さを示すと同時に筆者の個性による文体的なものとも考えられる。

○ついで、接続詞について述べよう。先きの語学的要素を記述する際には割愛したので、ここに記すことにする。

前編 扱・或ハ・又・又ハ・さらば・されば・然れども・去ながら・故に・故に・しかも・然らば・されども

後編 又・又ハ・扱・或ハ・しかしながら・去ながら・則・しからば・さらば・されども・なれども・故に

前後編とも、使用数の多い（三例以上）ものをあげれば、

前編 扱11、或ハ10、又9、又ハ4、さらば7、されば3、

後編 又43、扱7、しからば3、しかしながら3、

この様相は、叙述内容に拘わるものではなく、単語を撰択する言語主体の個性の現われと見るべきものであろう。

ハ文 体

細部にわたって、語法的事実や語彙の性質などから、文体的特色を明らかにして比較をする方法については、すでにあらまは述べてきたところである。ここでは、同じ様な内容の記述と考えられる場面を採りあげ、前編・後編の差を考察する。

A 釣舟難破の場面

a₁ 西の山の端に鶴の乗そふな黒雲一むら立ぞと見へしが。雨

風そよ／＼催すれハ。替りやすき秋の日和。ゆだんならずと

櫓を立直し。磯に近よらんとすれど。次第／＼雨つよく。吹

風帆を破り柱を折船ハ飛がごとく。沖へ／＼と吹出され。命

をかぎり。櫓をおし立右よ左よとうろたへる内。月も雲に

引つつみめさすもしらぬまつくらやみ。東西をわかず何国へ

船を押べきやうもなく。腕も力もよハりはて〔前編〕

a₂ さも快晴成ける空、俄に戎亥の方より黒雲おおひ、悪風さ

つとふき来り、大波しきりに打よすれば、命をかぎりと櫓を

おし立、磯邊によらんとほつすれ共、吹風なを／＼つよくし

て、何国ともなく流れゆく、〔後編〕

傍線部に見る如く、a₂はa₁を模倣しているのは明らかであるが、

こまかく言うまでもなく、生々とした描写はa₁が勝り、詞章の調

子はa₂が整っていることがわかる。

B 繁華街の場面

b₁ その麓ハ皆揚屋町。芝居茶屋にてならびなき繁昌軒をなら

べ〔中略〕紙を切て蝶を飛し。石をたたいて羊にするからくり。

芝居もあれバ。瓢箪から駒を出し。煙草のけむりで我姿を吐。

膏藥売の弁舌なかるる谷川の水。柳の枝に衣のかけたかんば

んの見世ものハ。暮をころした報にて墓に生れたといふかた

ハ物。御評ばん／＼と横鉢巻りりしげなる〔前編〕

b₂ それより西門のくぐりを通り見渡せば、廻廊高樓高くそび

へ、瑠璃の高欄碑礫のぎぼう珠、玉のやうらく金の天蓋、伽

羅の床柱に珊瑚珠のらんま、七宝の宝珠には鳥の声美わしく

さへづり、空には孔雀鳳凰まひ遊び、濃香芬々として花ふる

かと疑はれ、心もきよく清わたる、〔後編〕

道頓堀・京都の四条の賑いが、目に見えるように浮んでいるのであろう。これに対して、後編の方は、用語は絢爛たるものがあるが概念的で具体性に乏しい。観念的な叙述に終始していると言いつてはなからうか。知識の豊かさは見られるが、筆力とこれを支える生活体験の乏しさが現われているのではなからうか。

C 会話・やりとりの場面

c₁ ヲヲセハしと言つつ内義も居直ッて一情出して息ばつて見ても、まだこわりが足らぬ故産れませぬ。最一しきりこハらんせ。埒の明ぬこわりやうじやと。せかさね亭主ハ泣声出して。此うへにこわつたら死るわひ。〔中略〕イヤ我が比翼なゆへ。イヤこなさんが埒明す。こなんの様な男持てハ産する度に身がつづかぬ。イヤ我がやうな女房持てハこわり死る。ごくとうめが。どろぼうめがと。いたさ紛れの女夫喧嘩。〔前編〕

c₂ あるじ旦那の声として、こりやりんよ、それ釜の下の火がもへ下る、そちが目見えした時、大の字で食を五人前づつはたきまるといふたが、中々でもない、此間見れば、奉るといふ字でたいてゐる、とうがいの火があを、うら口をしめよ、とうしんが三筋かして、ことの外火があかい、風爐の下

がよいか、〔中略〕汗水たらしてわめくにぞ、〔後編〕

c₁ は女夫いさかい、c₂ は旦那の小言ではあるが、c₁がいかにもいきた口喧嘩そのままといつた描写であるのに対して、c₂はいさ

さか理屈に走り、愚痴を含み、具体的な会話というよりは、観念的に小言の有様を示したという性格が見てとれる。「大の字」や「奉るといふ字」は薪のくべ様であるが、音声言語では理解しがたい。

文字面から来る知的な遊戯性と見うるものであろう。

まとめて見れば、前編には、描写を中心とし、具体的体験的な事実が写され、ために生活体験に根ざす筆の活力が見られる。これに対して、後編には、詞章の調子を大切に、用語記述に当つ

ては観念的知識が優先し、中には文字遊戯を含むものが存するよう、文章の書き方「文語的表現」が強く見受けられる。結論的に言えば、前編と後編は別人の手に成ったものと考えられる。

(三) 「和莊兵衛」前後編と「胡蝶物語」前後編との比較

「和莊兵衛」前後編の間には五年間の隔りがある。其の作者についても別人説がきわめて有力であり、前章での前後編の比較の結果から見ても別人と判断するのが妥当のようである。これに対して「胡蝶物語」の方は作者はともに馬琴であり、その間には一年の隔りしか存せず、後編の出来とともに前後編を「全本九冊」として発売している。この事情から、両書の比較に際しては、ともに前編・後編を有しながら「胡蝶物語」においては一体的要素が強いのに対して、「和莊兵衛」にあつては、それぞれ別個の特性を持つものとして取扱って行かなければならないと考える。

まず、「胡蝶物語」を書くに当り、馬琴は「発端」の中で、「一日遊谷子が著したる。和莊兵衛といふ冊子を見て思ふやう。老佛道を踏わけて。ひろく譬をとり。能書究て精細なれども。馬鹿に附る薬はなし。」と述べている如く、「和莊兵衛」を見ているわけであるが、この冊子が、前編・後編を指すか否かである。前記「発端」の中で、「白髪たる老翁（浦島）」の出現を記すが、これは「和莊兵衛」後編巻一の出端の「不思議や一人の老翁来り（鶴の精）」を念頭に置くものかと考えられる。さらに、同じく「発端」の中に「手長足長小人島。胸に穴のある国でも」と記されているが、後編の「長足国（手長島）」・前編の「自暴国」を指すものと理解できる。しかし、この二点は、老翁の出現は必ずしも直接の関連以外に考えられないわけでもないし、「手長・足長」については、大鏡三に「海賊に蓬萊山・手長・足長、金してまかせたまへりし」

や、枕草子に其絵の話が既に存するわけであり、「小人国」にしても、和漢三才図会に「東方有小人国……」と見え、想像上の存在は知られていたと考えるべきである。とすれば確かなものは「胸に穴のある国」と、前編巻四の「自暴国」だけとなり、馬琴は明らかに「和莊兵衛」の前編は見ているが、後編を見たという確証はないことになるわけである。以上を念頭におきながら、構想・国語学的特色の両面から比較を進める。

イ 構 想

卷立てと遍歴国について、「和莊兵衛」は前編四卷・六国、後編四卷・六国、「胡蝶物語」は前編五卷・四国、後編四卷・四国となっている。一卷一国の対応を見せるのは「胡蝶物語」後編のみである。もつともこの対応の乱れているのは「和莊兵衛」後編である。構成上、最大の特色は、「和莊兵衛」前編に存する「養生」の記事と、「胡蝶物語」前後編に附された「総評」の記事である。「養生」の内容は概略を先きに記したので、ここには「総評」の概要を紹介する。各巻の末尾に付いている。

前編・巻一（少年国）人の善悪は習による。善道へは進み難く

悪道へは入り易し。

巻二（色慾国）色を好むに礼節を尊ぶべし。

巻三（色慾国）情慾を仁義により抑制すべし。

巻四（強飲国）一人醒んより衆人の不酔にはしかず。

巻五（貪婪国）利と害とは相去ること遠からず。

後編・巻一（食言郷）世才に逞しきは経済家、浮薄の人は磊落

莊子は所謂磊落の人なり。

巻二（煩惱郷）聖人は情を失はずして慾を禁め、よく礼

節を立るもの也。

巻三（哀傷郷）よく哀みを忘るるものは喜怒もなく、好

憎なし。

卷四（歡樂郷） 天の作れる花を盗みてわが眺めとして罪なきにはしらず。この書に述べる所亦是夢也といふとき今我批評するも夢也。

「和莊兵衛」の「養生」が、直前の遍歴譚と直接にかかわらぬ文字通りの養生の教えであつたのに比して、「胡蝶物語」の「総評」はそれが附記された遍歴譚の教訓的倫理的課題を採り上げたマトメの性格がつよい。「和莊兵衛」の「養生」が、遍歴譚の荒唐無稽さに附加された「実用性」であるとするならば、その両者の関連の異質性を、馬琴らしく教訓性の強いものに変えることによって訂正したものと考えることもできよう。

もう一つ、構成上の特色は、「発端」の見出しの設定である。「和莊兵衛」は前後編ともに、卷一の冒頭に「発端」に当る記載がある。ただし、見出しは前編では「不死国」であり、後編には存在しない。この構成上の不備と見られる点を「胡蝶物語」では前編冒頭に「発端」の見出しを設け、以後の具体的遍歴譚と区別することと解決した。「発端」は前編の最初に付されているが、その末尾には後編の内容をも予告しており、前後編合せての構想がすでに示されているのである。

口 国語学的特色

音韻・表記の面では、「和莊兵衛」「胡蝶物語」両書ともに、e ↓ i、i ↓ e の現象が目につく点では差異はない。時代的な性質のものであろう。仮名遣での「ゐ・ゑ・を」は歴史的な正誤にかかわらず、「ゑ」の使用が多い点は両書共通である。また「わ・ハ」の混用は両書に見られるが、「僅か」が例外なく「ハ」表記をとる「胡蝶物語」の特色は、「和莊兵衛」に見られない。「四つ仮名」「開合」は両書とも乱れているが、開合については前述の如く「胡蝶

物語」の方に語別の規範意識が見られる。

語法の面では、代名詞・助動詞・接続詞について記す。人称代名詞では「和莊兵衛」において、前編に倭語、後編に漢語が多いことを前述したが、「胡蝶物語」と比較してみれば、「和莊兵衛」の方が語の種類が豊富であることに気付くであろう。「胡蝶物語」一人称 わらは・おら・やつがれ、二人称 そなた・おぬし・そもじ・おん身、「和莊兵衛」一人称 手前・それがし・拙龜・拙者・拙佛、二人称 其元・こなん・こなさん・われ・足下・貴佛・貴殿は、それぞれに特異なものである。助動詞について、まず時の助動詞は、両書の使用数が表で比較できる。一見して、「和莊兵衛」前後編ともに、各巻の使用数が、「胡蝶物語」に比して半分に満たない程に少い。「た」の使用が、巻により大きな差のあるところは両書、よく似ていると見られるが、「胡蝶物語」では「き」の用例数が「けり」のそれを大きく上廻っているのに対して「和莊兵衛」では若干ではあるが「けり」の方が「き」を上廻る使用数を示している。打消に「ない」を使用する「胡蝶物語」に対して「和莊兵衛」は「ず・ざり」のみである。^{註16} ついで接続詞について述べる。「和莊兵衛」前後編を通じて異り語数は前述の如く十五語である。これに対して「胡蝶物語」にあつては三八語を数える。次に二桁以上の使用数を持つもののみを掲げよう。

又・亦 18、されば 61、或は 58、夫 40、しかれども 32、しかるに 31、この故に 21、かかる故に 19、さて 17、且^カ 17、しかれば 15、かかれば 13、かくて 12、すなはち 12、ここをもて 10

この接続詞の語種の豊富さは、文章の複雑さに対応するように思われる。「しか」を中心としたもののみでも、「しかれども・しかるに・しかれば・しからば・しかるを・しかはあれど・しかのみならず・しかして・しかるときは・したれば」と極めて微細な語形の違いを見せている。筆者の並々ならぬ語感覚のこまやかさ

が見られ、「胡蝶物語」の特色の一つと見てよいのではなからうか。「そして」が一例存することも付言しておく。

おわりに

当時、異国廻り・遍歴譚の類^{註17}は、一定の流行をみたようである。「和莊兵衛」前編に先立つものとしては、元禄八年の「華夷通商考」五巻がある。この巻五に見える長崎町人の浜田某が、南蛮船にのって異国廻りをし、長人国に上陸した話材は、「和莊兵衛」の構想に何等かの影響があらうと思われる。次いで宝暦十三年の「風流志道軒傳」五巻があげられる。志道軒浅之進が飛行自在の羽扇を得て異国廻りをするのであるが、その国々は「大人国・小人島・長脚国・長擘国・穿胸国（中略）愚医国・ぶぎ国・女護島」である。「和莊兵衛」前編刊行の僅か九年前であり、直接的影響を考えるべきであろう。また、「和莊兵衛」の前編の翌年、後編刊行より四年以前のところで、安永四年の「珍術墨粟散国」五巻がある。大山志壯太が神人の術で「けし男」となり、「蚊の国鳥の国・花の国」を遊歴する話である。この後、天明二年に「異国風俗笑註烈子」五巻が刊行される。蝦夷の住人、烈子散人が「大自由国・大姪奢国・総変化国・大勇力国・大上品国」を遍歴する話である。その翌年、天明三年「東唐細見斬」四巻が出版される。異国屋芭蕉平が「太陽国・大陰国・放蕩国・無^ま眞^ま国」を遊歴する話である。此書には各巻末に教訓的記事が見出し項を添えて附記されているのが特色である。

この後、約三十年を経て馬琴の「胡蝶物語」が世に出るわけであるが、すでに異国廻り・遍歴譚の風潮は消えており、世は教訓性の強い読本の傾向にあった。「和莊兵衛」が「滑稽本」の中に含まれ、「胡蝶物語」が作者のこともあって「読本」の中に位置づ

けられるのも謂れのあるところである。「和莊兵衛」（とくに前編）の描写性に対して、同書後編及び「胡蝶物語」に見られる教訓性の強まりは、一には時代社会の要請でもあったと考えるべきであろう。「胡蝶物語」がどこまで「和莊兵衛」の影響を受けたかを、構想・国語学的要素などの面から検討して来た。結論としては、甚だ不確かな物言いしか出来ない状態であるが、構想面からは、すでに世の風潮としては薄れて了った「異国廻り」を敢えて題材として採り上げ、これに強い教訓性を付与して、独自のものを造り上げた力量は認めなければなるまい。言うならば模倣ではなくヒントを得たに止まるとも言えようか。国語学的要素からの検討は、その記述に当たっての、漢語の使用や接続詞の多用性などからは「胡蝶物語」に筆力を見ることができるとし、一方、代名詞の多様さなど描写の活力の点では「和莊兵衛」（前編）がすぐれていると言えるようである。今回は語彙面において「和莊兵衛」の状態、両書の比較ともに行うことができなかった。次の機会をまちたい。

註1 深井・水持「夢想兵衛 胡蝶物語」について 金沢大学教育学部紀要（人文科学編） 第35号 昭和61・2・28

註2 本稿では「異国奇談 和莊兵衛（安永三年刊）」を「前編」、「異国再見 和莊兵衛後編（安永八年刊）」を「後編」と呼ぶ。

註3 「胡蝶物語」前編に刊記は見られない。底本とした架蔵本の後編巻四の裏表紙に「和漢西洋 書籍賣捌處／大阪心齋橋博愛町角 群玉堂河内屋 岡田茂兵衛」とある。此帖のみに用いられた子持ち界線が縦二横一、横小さいことから見て、此帖のみ後刷の際に付加されたものと思われる。

註4 巻四の後半の話には「養生」の記事がない。ただし、話の末尾に近く類似の記述は見られる。日本への帰着を以て話を完結するため、別掲の項目となかったであろう。

註5 前編は殆どの漢字に振仮名が付いている。後編は板本によらなかった

ので、振仮名が見られない。そのために、特に音韻の項では用例が少く、前編・後編の両者に該当する用例の上で差違を生じた。

註 6

（一）内の数字は人称代名詞の数で、内数である。

註 7

・の下の数字は各巻にある「養生」内の数字である。

註 8

巻三・巻四は、巻内に二の話を収めているので、別個に数字をあげた。

註 9

なお、巻四後半の話に「養生」は無い。

註 10

註 1 と同文獻に記述がある。（33頁）

註 11

「白話小説翻訳集」一期二期が波古書院から出版され、具体的な資料が見られる。すでに刊行された同書院の「唐話辞書類集」二十巻も、この翻訳過程にかかわって作成されて来た辞書群であらうと思われる。

註 12

「しもやしき」の仮名は「別業」の左傍に付されている。

註 13

岩波「国書総目録」は、前編 遊谷子、後編 澤井某としている。「徳川文芸類聚」第三巻の例言には、「和莊兵衛前後八巻」として掲げ、「著者遊谷子の傳未だ詳ならず」と同一作者の如く扱っている。輝峻康隆著「江戸文学辞典」では、「前編の遊谷子と後編の澤井某とは別人であらう」としている。

註 14

「大人国」の後に「養生」の記載はない。宏智先生が和莊兵衛に説き聞かす部分で、遍歴は終了する。その最後の部分を掲げた。内容的には宏智先生の説教が、「養生」に当ると見ることが出来る。

註 15

「胡蝶物語」前編巻一の「発端」末尾に、「亦彼四ツの国の間に、四ツの郷あり。哀傷郷といひ。煩惱郷といひ。食言郷といひ。歡樂郷といふ。おの／＼風に随て。到らんこと自在也。」と記して、後編の目録を予告している。

註 16

近い時期のものでは元禄八年「華夷通商考」などもある。

註 17

註 1 論文所載の表と、本論文所載の表。

註 18

「形容詞 ない」は数多く用いられている。

註 19

此所に挙げられたもの以外に、地獄廻りともいうべきものが刊行されている。たとえば元禄十年「西鶴冥途物語」五巻・元禄十一年「小夜風」十巻、「続小夜風」三巻、「新小夜風」六巻、明和十年「三千世界色修行」五巻 など。

註 20

（昭和六十二年九月十六日）